ナイトキングの国

倉朝央里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ナイトキングの国

【Ｎコード】
Ｎ８１２１Ｗ

【作者名】
倉朝央里

【あらすじ】
国民の反発心を消してほしい。
長寿の薬を探し求める二人にとある国王はそう依頼する。彼等が記憶を消すことが出来るという噂は大きく広まっており、また事実だった。しかし彼らはこれを拒否し、それにより軟禁生活が始まってしまうが――――――

side　宿屋の娘

宿屋の娘に好きな人が出来た。

一目惚れだった。宿屋に二人客が入り、家業の手伝いをしていた娘は運命と呼んでも過言でもない衝撃を感じたのだ。歩く度にわずかに揺れる銀にも見える白髪は日の光を浴びて更にその色を薄くしていた。男にしては大きめな瞳は未だかつて見たことがない金色にも見える薄い黄色をしていた。何よりもそして特徴的だったのはその声だった。見る相手に清潔感を与える白地のシャツを着ているせいか爽やかな印象を受ける。

「クジュ、明日は街を散策したいと思うんですけどどうですか？あ、保存食とかもいくつか買わないといけないですしね」

一緒に宿屋へやってきたクジュへそう話しかけるウォルの声はまさしく澄んでいた。黒ずんだ液体の中に水のようなその声をひとつ垂らせばそれだけでその黒全てを浄化出来るのではないかと思えるほどウォルの声は澄みきっていた。きっとウォルの清らかさが声にあらわれているのだろう。

話しかけられているクジュは話は聞いているようだが口を開くことはなく。首を振るだけで返事をする。一切手が加えられていない無造作にカットされた黒髪が首を振る度に揺れる。誰かを睨みつけるように常に細められている漆黒の瞳はウォルに向いている。ウォルと対照的にすることが目的なのか、単にクジュ個人の好みなのかウォルと同じ型の黒地のシャツを着ていた。そしてそのシャツの袖からのびる両手の爪は黒く塗られていた。ウォルが爽やかな印象を受けるのに対してクジュはどこまでも陰湿な印象ばかりを受ける。

しかし客にそんなことを言えるはずもなく娘はとびきりの笑顔を作って二人を部屋へ案内する。ウォルが澄んだ声でありがとうと言

って微笑んだ。

「お二人はどこに行かれるんですか？」

「ううん……特に目的地はないんです。探し物をしてるんです」

「探し物、ですか？」

「ええ、そうなんです。寿命をのばすことが出来るような薬を探しているんですけど、心当たりはありませんか？」

「いえ、すみません」

「いやいや、いいんです。この街ではもう聞き込みしていたんで駄目元で聞いてみただけです」

ウォルが白い歯を見せながら爽やかに笑う。なんて素敵な人だろうかと娘は内心でウォルに対する高感度をこれ以上ないくらい上げながらクジュを一瞥する。ウォルの斜め後ろを歩くクジュは目の前の娘とウォルの話など興味がないとばかりに通路の壁に貼り付けられているポスターなどを眺めていた。見つめすぎて目が合ってしまうのも嫌なので視線を前方に戻す。

「こちらがお二人のお部屋になります。二人一部屋でよろしかったでしょうか？」

「ええ、お金もありませんから」

この部屋にはベッドが二つ備えつけられている。けれど二人一部屋というのは結構狭いと思うのだ。ウォルがそれでいいと言うのなら仕方ないが。

「もう少し経ったら夕食をお持ちしますね」

「ありがとうございます」

部屋の扉を開けて脇に立つ。二人が部屋に入ったのを確認してから一礼してこの場を去る。扉を閉める瞬間にクジュと目が合った。細い目を更に細めて娘を睨むクジュはすぐに興味をなくしたのか目

を逸らす。娘は扉を閉め切ってから夕食の準備をしている両親の手伝いをするため台所へ向かうことにした。

「……あの人は怖い」

刺すような視線とか、全部を塗り潰してなかったことのようにしてしまうのではないかと錯覚してしまう漆黒とか。クジュはウォルの傍にいることでウォルの清廉さを打ち消してしまっているような気がする。それではウォルが可哀相だ。

話を聞いたところによると二人は明日には宿屋を出て行ってしまうらしい。街もその時にもう出てしまうようでつまり明日になればもうウォルに会えなくなってしまうということで。

「ねえ、お母さん。私夕食持って行っていい？」
「いいけど、そんなこと言い出すなんて珍しいわね」
「うん、まあね。たまにはちゃんと手伝おうかと思って」

台所で少しばかり夕食を作るのを手伝ってから自室へ戻る。誰も入ってこないように鍵を閉めて机の引き出しからレターセットを取り出した。それから小さめの引き出しを探ってペンを一つ引っ張り出した。あまり使わないので何度か振っていらない紙に試し書きをしてみてペンがきちんと使えるか確認する。それから娘はどう書き出そうかと頭を悩ませた。

娘はこれでウォルに自分の気持ちを伝えるつもりだった。出会って一日も経っていないのだからウォルの何を知っているわけでもない。だが今気持ちを伝えなければもう会うことすら出来ないかもしれないのだ。そんなことに耐えられるはずがなかった。あわよくばウォルにいい返事をしてもらって、ウォルがこの街に残るなんて言ってくれればもの望みはないのだが流石にそれが実現出来るなどとは本気で思うわけもない。ただ玉砕覚悟で気持ちだけでも伝えてお

きたい。それが本心だった。

「私は、貴方が、好き……です。もしよければ付き合ってくださ……い、っと」

声で内容を辿りながら手紙をまとめ上げていく。二枚ほどでまとめることが出来た内容を何度か見返して折りたたむと封筒へ入れる。丁寧に封をしてからそれをポケットに皺が出来てしまわないように注意しながらポケットへしまう。なるべく音をたてないように椅子からおりて鍵を開ける。別に忍ぶ必要はないのだが恋文を書いていたと親に知られるとなんとなく気まずいような気がした。

そろそろとドアを開けて台所へ急ぐ。時間的にはもうそろそろ夕食の準備が出来ている頃だろう。台所から漂ってくる良い匂いで夕食が出来ていることを確信する。その夕食を親がお客さんへ運んでしまうよりも早く台所へ辿り着かなくてはいけない。廊下は走らないように、と母にいつも注意されていたが今回はそれを破ってほとんど走るようにして台所へ向かう。台所へ辿り着けば両親はちょうど夕食を運び出そうとしているところだった。

「あ、待って！　さっき来たお客さんの夕食私が運ぶ！」

何事かと首を傾げる親から二人分の夕食を奪うように受け取ってからそれらを落としてしまわないように注意して歩き出す。

「私もたまには手伝いたいの」

不審がる両親にそう告げてから夕食が冷めてしまわないうちに、と少しだけ足を速めた。浮つく心をなんとか落ち着かせてウォルのいる部屋の前に立つ。大きく深呼吸をして自分に落ち着くように言い聞かせる。いつまでも部屋の前に立っていたのでは不審者になってしまうから大きく息を吸い込んだ後覚悟を決めてドアをノックする。手に持っていた夕食がぐらついて焦ったがなんとかバランスを

取り戻すことが出来た。そちらに気を取られたせいで緊張が随分と消え失せてしまい、ドアが開いた途端身体が緊張で強張った。

「あ、さっき案内してくれた……」

「夕食をお持ちしました」

緊張をウォルに悟られないように平静を装う。わずかに震える手に気付かないふりをして二人分の夕食を乗せた盆をウォルへ手渡した。

「ありがとうございます。おいしそうですね」

「両親が作ってるんです。私は少し手伝いをしただけなんですけど」

「手伝いでもすごいですよ」

世辞なのか本心なのかは定かではないが屈託ない笑みを浮かべながらそう言うウォルはもう一度娘に礼を言った。それから部屋の中に引っ込もうとするので娘はそれを引きとめる。

「あの、受け取ってもらいたいものがあるんです」

「……俺にですか？」

「はい」

声が上ずってしまわないように気を付けながらそう答えてポケットに突っ込んでいた手紙を引っ張り出した。少しだけ皺になっていたので両端を持って軽く引っ張ることで皺をのばしてからウォルへ渡す。ウォルは差し出された手紙を受け取れないでいる。夕食を持っているせいで両手が塞がってしまったからだ。

「あ、すみません」

「いや、大丈夫です。あー、えっと、お盆の上に置いてもらってい

いですか」
「はい、すみません」
汚れてしまわないようにお皿とお皿の間に手紙を置く。少し体重をかけてしまったせいでウォルがぐらついたのですぐに身を引いた。
「お返事しますね」
そうウォルが返答するだけでこれ以上ないくらい心臓が跳ねる。期待に胸が躍るがいつまでもここにいては迷惑だろうと思い慌てて頭を下げる。
「ではごゆっくり」
「ありがとうございます」
ウォルはきっと笑っているのだろうけどそれを確認する余裕がないほど娘は浮かれていて、目を合わせることもなく来た道を戻って行く。出来るだけ足音を立ててしまわないように、夕食を運び終えたことを報告するために両親の元へと急いだ。浮つく足を必死に地から浮かせてしまわないようにと注意しながら娘は歩いた。

今日は気持ちよく目覚めることが出来た。鳴り響く目覚まし時計を撫でるようにして止めてから髪を何度か撫でて寝癖を直す。何度撫でても寝癖は一向に落ち着く様子がない。仕方ないので寝癖は諦めてベッドから這い出して服を着替え始める。
「うー……」

目を刺す太陽から少しでも逃げようと瞬きを繰り返すが瞼の裏が赤くなるばかりで事態は何も変わらない。寝巻を脱ぎ捨てて服に腕を通す。寝起き独特の倦怠感を纏わりつかせながらしばらくの時間をかけてなんとか着替えを済ませる。今日は家業の手伝いをする気はなかったのであまり早く起きてはいなかった。のろのろとした歩みで自室を出ればお客さんがちょうど宿屋から出て行くところだった。

白と黒がはっきりわかれた二人は娘が昨晩夕食を運んでいったウォルとクジュだった。両親がそれを見送っている。それを見ては娘も出ないわけにはいかないだろう。慌てて玄関まで出ればウォルとクジュの姿はだいぶ小さくなっていた。その姿を見つめてすぐに頭を下げる。頭を上げた時にはちょうどウォルがこちらを振り向いて手を振っていた。

あの澄んだ声はこの距離では聞くことは出来ない。それが惜しかったが仕方のないことだと思った。ほぼウォルにだけに視線を送りながら娘は小さくひとつ息を吐いた。

好きだったはずの人が行ってしまった。

藪から棒に

「摩訶不思議な術を使うと言われているクジュ様、ウォル様とお見受け致します」

突如目の前に現れた男は面で顔を隠していた。困惑を滲ませながらクジュとウォルが男を見れば男は面ごしにこちらを睨みつけた。

「だったらどうした」

クジュが重々しく口を開けば男が身体を震わせたのがわかった。それもそうだろう。クジュの声は一句だけでもそれを聞いた人の耳に纏わりつく。真夏の茹だる暑さにも劣らない不愉快さを感じさせる纏わりつき方をもってしてクジュの声は更に人の内側へ滑り込む。粘着質なその声は聞いた者の中に潜む後ろ暗い部分をじわじわと拡張させていく。内側を暴かれているような不快感にウォルの眉間にも皺が寄る。何度聞いてもこの声には不快感を覚えてしまう。

警戒心をあらわにし、愛想をかけらも見せようとはしないクジュに気分を害した風もなく男は面のせいで表情の窺えない顔をこちらに向けて口を開いた。もっとも、面をしているせいで開いた口は見えないが。

「それならば、我等に御同行願いたい」

「我等、ですか？」

ウォルが首を傾げる。どこをどう見ても男は一人しかいない。それなのに男は我等と口にした。その矛盾に理解が出来ないでいるとクジュがウォルの肩を叩いた。

「ん？」

振り返ればクジュは無言で更に後ろを指差している。背後には十人ほどが全く同じ面をつけ、それぞれに武器をも持って並んでいた。

「これは……大変ですね……」

「もう一度だけ。御同行願います」

前方の一人が先程と全く同じ声音でそう繰り返す。クジュとウォルは顔を見合わせると両手を耳のあたりまで挙げた。

「俺達は人並み以上の戦力があるわけじゃないですからこの数を相手にするのは無理ですね」

「一対二でも怪しいがな」

「ああ、それは言えてますね」

そう言う通りクジュとウォルの手持ちには武器のようなものは一切ない。武器を突き付けられてわずかに身体が震えているがクジュもウォルもそれには気付かないふりをして前方の男を見据えた。

「大丈夫です。抵抗しない限り危害は加えません」

そう男が言うと同時に二人の首筋に槍が、銃が、刀が付きつけられる。そのひやりとした感覚に内心恐怖しながらもそれを表に出すことなく虚勢を張って二人は示し合わせたように溜息を吐いた。

「申し訳ありません。これも王の御意志ですので」

本当に申し訳なさそうに前方の男は一度頭を下げると懐から縄を取り出して二人へと近付いた。

不躾に最強

面をつけた男に連れてこられたのは質素とは言い難い豪華な一室だった。延々とした庭を抜き去って絢爛豪華な官邸に通された二人はそれぞれが別の部屋へと通された。部屋といっても牢獄のような場所ではない。部屋の棚にはところ狭しと高そうな壺や置物が陳列されている。部屋の中央に置かれているベッドはこれまた高級そうな生地で出来ていて触ると滑るように流れた。ここに来るまでは縄で拘束されていたのだが今は外されていて、手足を拘束されているわけではない。無理矢理連れて来られたにしては扱いが良いような気がする。ウォルと引き離されたのがどうにも気に入らないがこうして自由なだけマシだと思うべきだろう。

これからどうするべきか。逃げるという選択肢もなくはないがクジュもウォルも武術に長けるわけではないのだ。ましてやここを誰にも気付かれず、もしくはうまく立ち回って脱出出来るほどの策士なわけでもない。それがわかっているのでその上で行動を起こすのは危険だろう。今は抵抗しない限りは手出しをしないという面の男の言葉を信じるしかないように思えた。

「鍛えてれば良かったか……」

元々ウォルはわからないがクジュは戦闘には向いていないのだ。思いもしないことをそうぼやいてみて退屈を紛らわす。ベッドに腰掛けて足を投げ出したところでドアがノックされた。こちらの返答があるよりも早くドアは押し開けられる。

「突然連れて来ちまって悪いな」

生まれつきなのかくすみのない光を跳ね返すような金色の短髪。

それは毎日丁寧な手入れがされているのか男が身体を揺らす度身体の線に沿って滑らかに流れた。笑顔こそ浮かべているがその眼光は鋭く敵意すら感じる。男が身につけている衣服にはきめ細やかな刺繍や金での装飾が施されており、一般人でないことは一目瞭然だった。

「……」

男にどう答えたものかとクジュは苦悩した。返答しようにもクジュの声は少しばかり特殊なのだ。クジュの声を聞けばほとんどの人間は眉間に皺を寄せる。つまり不快にさせてしまう。そういった性質なのだ、仕方がない。だからこれまではやり取りのほとんどはウォルに任せていたのだがウォルがいないのであればクジュが返答するしかないだろう。しかしそう気軽に声を聞かせてしまっていいものだろうか。そうやってぐるぐると考えていると男はクジュの返答がないことにも構わず続けた。

「俺はチェック。この国の王をやらせてもらってる」

王と言うわりにはチェックの仕草や言動からは王らしい気品は感じられない。その言動は粗削りで動作のひとつを取っても繊細さは見られなかった。そのあたりはチェックの人柄なのかもしれないが総合的にクジュの目から見てチェックのことを王だとは思えないでいた。

「お、その顔だと信じてねえな？　その辺は自由だけどな、俺の頼みは聞いてもらいてえ」

なんと不躾な物言いだろうか。拉致紛いなことをされている身なので口応えをする気はないが眉間に皺が寄るのは致し方ないことだ

ろう。チェックはクジュの反応などどうでもいいのか更に続けた。
「俺はな、王の座に着いてから日が浅いんだ。そのせいもあって反発が絶えなくてな。お前さんの使うおかしな術な人の記憶を消せるんだろう？」
「……反発してる人間のその記憶を消せとでも？」

クジュが言葉を発した途端にチェックの身体が強張る。その瞳は見開かれ恐怖が宿ったがその反応には慣れきっていたので意にも止めない。チェックは流石は王と言うべきか恐怖をすぐさま押さえ付けてから何事もなかったかのように続けた。その額には汗が伝う。

「そうなるな」
「無理だな。やるやらない以前に規模がでかすぎる。他をあたれ」

この場で嘘をついてもいずれ出来ないことはバレてしまう。小規模ならば多少の記憶を改変することは出来るが反発する者は一人や二人ではないのだろう。そうでなければおかしな術と持つという噂のみで王が動くはずもない。藁にも縋りたい状況に置かれているのかもしれない。

クジュの返答をどう受け止めたのかチェックは芝居がかった動作で首を振るとドアに手をかけた。

「その返答は交渉決裂ってことか。でもな、俺には手段を選んでる暇はねえんだ。そっちがそうくるなら軟禁生活にようこそ、ってことになるわな。良い返事をくれるまでここから出すわけにはいかねえ」

半分ほど開いたドアの間をすり抜けたチェックはドアを閉めながらその隙間に手を差し込んで小さく何度か振った。

束の間に再会

ウォルはクジュと引き離されてひたすらに憂鬱になっていた。クジュと同じように豪華な部屋に通されたがそれを眺める余裕もないほどウォルは落ち着きを欠いていた。忙しなく部屋を歩き回りぶつぶつと小言を繰り返す。

「クジュ大丈夫かな。口下手だから誰かを怒らせたりしてないといいんだけど……とにかく早く合流しないと」

冷静さを取り戻せないままクジュと合流することばかりを考える。拉致されている手前、あまり目立った行動をするのは得策ではないがクジュを一人にしていては何が起こるかわからない。ただのいざこざで終わればいいのだがクジュの場合そうもいかないかもしれない。その懸念がウォルに焦りばかりを募らせた。

「あああ、もう！　どうしよう！」

動くべきか動かざるべきかしばし考え込んだ末に出口に足を向けた。その瞬間にドアがノックされてその足が竦む。

「あ、はい。どうぞ」

逃げ出そうとしていたことを悟られないように後退してベッドに腰を下ろしてから声を上げる。それを待っていたドアの向こうの相手は極力音をたてないよう注意を払いながらドアをゆっくりと開いた。

「失礼します」

深い一礼をしてから入室してきたのは面をつけた男ではなく、給仕をする者を思わせる衣服を身に付けた女性だった。この官邸の主ではないらしくその手は炊事で酷使しているのか荒れて赤くなっており、顔に化粧は一切施されてはいなかった。ここで働く者だろうか。女性はドアを丁寧に閉めるともう一度礼をした。

「私はこの官邸で給仕などをさせていただいております、シーナと申します。この度は王がこのような手荒な真似をしてしまい申し訳ありません」

「いや、あまりお気になさらないでください。ほら、長い距離移動する賃金が節約出来ましたし」

「……どこか目指されているのですか？」

「まあ、明確な目的地があるわけではないのですが」

シーナがあまりにも申し訳なさそうに謝罪するのでウォルは思わずそう言い訳する。嘘を言っているわけではない。目的地はないがクジュやウォルは出来るだけ多くの場所を旅して回る必要があった。そのために拉致という形であってもこうして誰かと交流をとることが出来るのは悪いことではない。それにそうポジティブに考えなければこんな状況で平然としていることは出来なかった。

シーナの外見はある意味クジュと酷似していた。鴉の羽の色を織り込んだような黒髪は仕事をする上で邪魔なのか低いところでひとつに束ねられて尻尾のように彼女が動く度に揺れている。瞳も同じように深い黒をしており、見つめ続ければ吸い込まれてしまうようだった。

「俺と同じようにもう一人ここに連れてこられたはずなんですけどどこにいるんですか？」

「クジュ様のことですか？　でしたら王が協力を願っている頃かと」

「協力？」

クジュとウォルにはそれぞれ少しばかり特殊な能力が備わっている。自慢して回るほどのものではないが、二人はその能力を活かして生活を成り立たせていた。そのため噂が流れているのも決して悪いことではないし、出来るだけ依頼は受けたいと思っている。多くの場合、求められるのはクジュの能力で、依頼を受けるか否かを判断するのは専らクジュの役目だ。今回も依頼だと言うのならばウォルが口を挟む余地はないのだろう。それに依頼だと言うのなら易々と殺害されてしまうということもない。そこまで聞いてウォルはひとまず安堵した。

「クジュ様は記憶を消すことが出来るのだと噂でお聞きしました」

「まあ、そんなところですね」

厳密には消すのではないのだがそれを今シーナに言ったところでどうなるわけでもないので黙っておくことにする。

「王はクジュ様に消していただきたい記憶があるのです。この国で拡大しつつある王への反発心を」

「はあ、それは……」

恐らくはクジュでは無理だろう。それはわかったがそれを最終的に判断するのは実行主であるクジュだけだ。ウォルが口を挟めるはずもない。ウォルが表情を曇らせたのが困ったように見えたのかシーナは申し訳なさそうにもう一度頭を下げた。

「ウォル様、心苦しいのですが私個人からも依頼があります。消していただきたい記憶があるのです」

「それは貴女の？」

「ええ、消していただきたい私の記憶は、」

彼女が集く言葉を紡ごうとした瞬間、乱暴にドアが開かれる。力の限り開かれたドアは蝶番が悲鳴を上げる。壁に叩きつけられても勢いは衰えず、跳ね返るドアを受け止めたのはチェックだった。その背後にはクジュも顔に憂鬱を貼りつけて佇んでいた。

「お。取り込み中だったか」

「クジュ！」

チェックの言葉が終わるとほぼ同時にウォルが声を上げる。立ち上がってチェックを押しのけるようにしてクジュの目の前まで来た。チェックはウォルの邪魔になってしまわないように道を開け、シーナはそのチェックに一礼をして少し後ろへ下がる。

「クジュ、心配してたんですよ。クジュが変なこと言って誰か怒らせてやしないかって」

「……」

心外とばかりにクジュが表情を歪めたがウォルはそれを黙殺する。チェックは二人の様子を眺めて溜息を吐いた。

「コイツがなあ、ウォルに会わせろ会わせろってうるさいからよ、仕方なく」

「王、クジュ様への依頼は」

「断られた。無理だとさ。まあ俺に諦める気はねえがな」

「そうですか」

それだけ告げるとチェックは踵を返してもと来た道を戻り始める。彼が歩く度に衣服に取りつけられている金の装飾がかちゃかちゃと

擦れる音をたてる。廊下まで出たシーナは深々と礼をしてそれを見送った。

「面倒な人に捕まりましたね」

「そうだな」

憂鬱が凝縮されたクジュの嘆息混じりの声に頭を下げたままのシーナが身体を震わせたのがわかった。

気軽に王様失格

ウォルはクジュと離れることを拒んだ。それを受け入れたチェックはクジュにあてた部屋にもうひとつベッドを運びこませ、二人で一部屋を使用することを許可した。脱走を試みれば命はないと念を押して、の話だが。それでも二人にとっては有り難いことだったのでその日は脱走など考えることなく寝心地のいいベッドで睡眠をとった。これまであまりきちんとした場所で睡眠をとってこなかったせいかクジュ、ウォル共にその日は深い眠りに落ちてしまっていたようで、目覚めたのは昼が近くなった頃だった。

「……クジュ、おはようございます」

「おう」

黒ずんだ液体の中に水のようなその声をひとつ垂らせばそれだけでその黒全てを浄化出来るのではないかと思えるほど澄んだウォルの声。それをすぐさま聞いた者の中に潜む後ろ暗い部分をじわじわと拡張させていく錯覚に陥らせるクジュの声が相殺する。クジュの声をウォルが浄化し、ウォルの声をクジュが侵食することで二人の特殊な声はなんとか平均的なところまで持って行くことが出来ていた。

「なんかこんな時間に起きるなんて重役出勤みたいですよね」

「ある意味重役だがな」

「言われてみれば、そうですね」

目を擦りながら苦笑するウォルに冷たく返してからクジュは布団を押しのけてベッドから出る。眠気が抜けきらないせいで足取りはおぼつかないがドアまで辿り着くと体重をかけるようにして押し開

けた。

「クジュ、どこ行くんですか？」

「着替えがない」

「あ、本当ですね」

ウォルは言われて初めて気付いたのだがこの部屋には着替えらしき物が置かれていなかった。忘れていたのだろうか。ウォルは構わないのだがクジュは寝起きの姿のままでいるのには耐えられないらしい。誰か人を捜して着替えを用意してもらうつもりなのだろう。それならば一緒に行こうとウォルが布団から出たところでクジュの動きが止まった。ドアを開けるべく体重をかけた体勢のままクジュは耳を澄ましているようだった。何事かとクジュに倣い耳を澄ます。聞こえてきたのは陶器が割れる音だった。それもひとつや二つではない。

「ちょっ、クジュ！？」

割れる音が鳴り止むと同時にクジュはドアを完全に押し開けて部屋を出た。あの音は相当に近くから聞こえていたので動かない方が得策だとは思うのだがそれを伝えるよりも早くクジュは出て行ってしまったので慌ててそれを追う。

何やら騒動が起きていたのは隣の部屋だった。誰かが怒鳴っているのがわかったが壁で隔たれているせいで内容までは聞き取れない。内容を聞き取ろうとクジュが忍び足で部屋へ近付く。あともう五歩ほどで騒動の発信源である部屋のドアに触れようかと言うところでそのドアが乱暴に開け放された。

「王！　俺は納得出来ませんから！」

チェックでもシーナでもない。初めて見る男は腰に刀を差しており、全てを吸い込んでしまいそうなほど深い黒をした瞳は部屋の奥を睨みつけていた。
男は二人に気付くと怒りに燃えた瞳を隠すかのように瞼を下ろした。次に瞼を上げ、目を開いた時には瞳からは憎悪は拭い去られており、男は一礼すると踵を返してどこかへ行ってしまった。

「なんだったんでしょうね……」
「見苦しいところを見せちまったな」

ドアに手を沿えて廊下を覗くようにしていたウォルがそう呟けばクジュが返答するよりも早く溜息混じりの返答が部屋の中から飛んできた。チェックの声だ。部屋から出てきたチェックは起床して随分時間が経つのか髪は綺麗に纏められていて、昨日よりも豪華さを感じさせる衣装に身を包んでいた。

「あれは弟だ」
「王様の、ですか？」
「そんな堅苦しく呼ぶな。チェックでいい。……いや、俺じゃなくてほら、いただろ、女が」
「シーナさんの？」
「そう。シーナの弟。俺とシーナが付き合ってるのが気に入らないんだそうだ。一応身内だから適当にあしらうのも気が引けてな」

説得を試みているのだが議論は平行線で互いに歩み寄れる気がしないのだとチェックは自嘲を織り交ぜながら説明した。眠いのか説明し終わってからチャックは大きく欠伸をひとつ零し、両腕を振り上げて背伸びをする。

「んん……。で、お前らはなんでここにいるんだ？　隣の部屋がう

るさくて目が覚めたか？」
「いえ、そんなことは」
「着替えがない」
端的に用件だけをクジュが伝える。不満を含ませていたわけではなく、ただ事実だけを口にしたといった様子のクジュだったがチェックは申し訳なさそうに眉を八の字に下げた。クジュの声に怯えたのか瞳が一瞬揺れたがすぐに何事もなかったかのように揺れはおさまる。
「ああ、悪い。配慮が足りなかった。今すぐシーナに用意させる」
ドアを開け放したまま部屋に戻って行ったチェックは部屋に取り付けられている電話に手をかけた。二人が眠った部屋にはなかったのだがこの部屋には電話があるようだ。金色をした龍が電話本体に巻きついており、子機へは金色をした蛇が巻きついていた。本体と子機を繋ぐくるくると何度も円を描いているコードはやはり金の細かな装飾が施されていた。チェックは子機を持ち上げると本体のボタンをいくつか押して、子機を耳に押し当てた。
「シーナか？　ああ、俺だ。クジュとウォルの着替えがないそうだから用意しておいてくれ」
電話の向こうのシーナが何か返答をしているのかチェックが何度か頷く。それから「頼んだ」とだけ残してチェックは子機を元の場所へと置いた。がちょん、というなんとも間抜けな音がしたがチェックは慣れているのか何の反応も見せない。クジュの背後ではウォルが笑いを噛み殺していた。
「俺は今日出掛けるからここにはいねえんだ。世話はちゃんと任せ

てあるから俺のいない間に依頼のこと考えておいてくれよ」
「無理だと言ったはずだが」
「……だから考えておいてくれって」

クジュの声に慣れないのかチェックは一瞬口を噤んで冷や汗を浮かべたがすぐに繕って引き攣った笑みを浮かべた。繕うのに時間が足りなくて引き攣れてしまったのだろう。

「どこに行くんですか？」
「これでも一応王様だからなあ……。家に籠ってばかりもいられねえんだよ」

ウォルの質問に曖昧に答えてからチェックは二人の間をすり抜けて廊下を歩き出した。足取りは重く、外出することが憂鬱なようだった。それを見送るクジュの瞳は多分に呆れが含まれている。

「あいつは本当に王なのか？」
「そうみたいですよ」

あの姿を見せられてウォルもだんだんと自信がなくなってきたのだがシーナの話を聞く限りそれは真実なようだ。ひどく曖昧な答え方になってしまったがそれを受けたクジュは眉間に皺を寄せた。

「呆れた。国が潰れるのも時間の問題じゃないのか」
「さあ、どうなんでしょう？」

だからこうしてクジュが連れてこられたのだろう、という言葉は言われずともわかっていると思うので飲み込むことにした。

老人庭師はかく語る

チェックが出掛ける間際に言ったように少しするとシーナが二人分の着替えを持ってやって来た。それに着替えてからシーナが用意したのだという豪華な朝食を有り難くいただいて、その後シーナの案内で庭へと連れて来られた。

「すみません。本当こちらが足を運ばなければいけないのですけど、我儘な子で」

二人を退屈させないためなのか時折通りかかった部屋の説明をしながらようやく庭へ出たところでシーナはそう謝罪した。どうやら誰かに会わせるつもりらしい。クジュからすれば部屋に一日中閉じ込められているよりは気分転換が出来ていいのであまり気にしないでほしいと思う。それを伝えるためにはどうしても彼女を怯えさせることになってしまうので伝えることは諦めているとウォルが口を開いた。

「気にしないでください。部屋にずっといるよりは気分転換出来ていいですから」

「……すみません、本来ならお客様として招かなければいけないのに軟禁のようなことをしてしまって……」

「あ！　いや！　俺はそういうつもりで言ったんじゃなくてですね！」

ウォルのフォローは良くない方向へ解釈されてしまったらしい。一気に沈み込んだシーナにどう声を掛けようかと考えあぐねているウォルは助けを求めるようにクジュを見たがクジュにはどうすることも出来ないので無視する。

「あ、ひどい」

非難するように飛ばされた声も無視する。

こうして話しながらもシーナは庭を突き進んでいく。その後を追っていくとだんだんと木々が少なく、視界の開けたところへ出始めた。三人が芝を踏む音に混じって時折何かが風を切る音が耳に届く。その正体が気にはあるが落ち込んでいるシーナに問うのも気が引けるので黙っておいた。歩けば歩くほどその音は大きくなり、更にそれに加えて気合いを込めた声まで聞こえてきた。それらから予想するに誰かが何かを振っているのだろう。

「あ」

不意にウォルが声を上げた。木々はもう既にほとんど見当たらなくなっており、視界はかなり広がっていた。その視界に飛び込んできたのは、ウォルだけではなくクジュも思わず反応を示してしまうものだった。ウォルと違って声は出なかったが代わりに目が軽く見開かれる。二人の反応を見たシーナは不思議そうに首を傾げた。

「あれ？　もしかしてもう顔を合わせてたりしますか？」

「……ええ、ちょっと見かけただけですけど」

視界に入ってきたのはチェックが言い争いをしていた男だった。木刀を握った男は掛け声と共にそれを振り上げ、振り下ろす。それをどれくらい繰り返していたのか深い黒髪は汗を吸い込んで更に黒く染まり、首筋にべったりと貼りついていた。男は前方を射殺すように睨みつけながら一心不乱に木刀を振り続ける。余程集中しているのか三人が近付いていることにも気付いてはいないようだった。

「ナイトラ、お客さんに挨拶しなさい」

シーナが男の名前を呼んだ。そこでナイトラと呼ばれた男はようやく三人に気付いたらしく振り上げた木刀を振り下ろそうとしたところでぴたりと動きを止めた。急に動きを止めたせいで髪に纏わりついた汗が飛び散ったがナイトラは気にも止めていないようだった。木刀を緩慢な動作で下ろしてから、流石に額から流れてくる汗は邪魔なのか服の袖で乱暴に拭う。それから億劫そうに三人の方へと首を回した。

「……クジュ様とウォル様ですか。本来は俺がそちらに出向くべきでしたね、申し訳ありません」

最後の一言は棒読みで謝罪の気持ちが込められているように思えなかった。それに文句をつけてやろうかとクジュが口を開きかけたところでそれを先読みしたウォルがそれを制す。そして喋る役割を引き継いだ。

「いえ、大丈夫ですよ。ナイトラさんはシーナさんの弟さんなんですよね？」

「はあ、まあ。それをどこで？」

「チェックさんから聞いたんです」

「ああ……」

チェックの名が出てきた途端ナイトラが苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。仮にも王だろうにそこまでチェックが嫌いなのだろうか。そのあからさまな態度を諭すようにシーナがナイトラの名を呼ぶ。それを受けてナイトラは今にも舌打ちでも零しそうな表情でわざとらしく話題を逸らした。かすかに乱れる息を整えながら首だけでなく身体も三人の方へ向けてナイトラは口を開く。

「俺はナイトラと言います。御存じの通りシーナの弟で王の護衛役として騎士をしています」

後半でチェックの名を出した途端これ以上なく嫌そうにナイトラの表情が歪む。乱れた息は既に整えられていて、纏わりつく汗が外気によって冷えてしまい冷たいのか首を振って汗を散らした。なんだか犬のような動作だと思う。

「毎日の日課の鍛錬で足を運ぶことが出来ませんでした、申し訳ありません」

相変わらずの気持ちの込められていない謝罪にウォルがもう一度同じような言葉を返そうとしたところでナイトラの眉間に皺が寄った。思えば先程からナイトラの不機嫌そうな表情しか見ていない気がする。今度は一体何だろうかとナイトラを眺めているとナイトラは二人に向かって一礼すると木刀をその場に投げ置いて舌打ち混じりに駆けて行った。

「……へ？」

「すみません。多分、王から電話があったんだと思います」

「電話？　この距離で聞こえるのか？」

「そうみたいです」

クジュの声に一瞬怯んだ様子を見せたがジーナは何事もなかったかのようにそう返す。そのあたりは彼女にもよく理解出来ていないのか苦笑混じりだ。

「ちょっとナイトラだけに任せると心配なので私も見てきますね、すみません」

「お気になさらず。俺達はこのあたりでぶらぶらしてるんで。ね、クジュ？」
「……」
クジュが無言で頷いたところでシーナはもう一度すみませんと申し訳なさそうに謝罪すると駆け足でナイトラが駆けて行った方向へ向かう。それをしばらく見送っていたがシーナの姿が見えなくなったあたりでウォルが大きく息を吐いた。
「やっと息を抜けるって感じですね。……クジュ、逃げますか？」
「いや……」
ウォルの問いにクジュは顎に手を沿えて考える素振りを見せる。すぐに結論は出たのかクジュは顎から手を離すと首を横に振った。乱雑に切られた黒髪が少し遅れてその動きに沿って流れる。
「無理だろうな。ナイトラは相当に腕が立つように思うし、この庭も相当に広い。迷わずに逃げ出せればいいが万が一迷った場合は絶望的だ。逃げるならもっと確実な時の方がいい」
「それはそうなんでしょうけど……」
クジュが言うことは尤もだ。正論だと思う。しかしクジュはチェックの依頼を拒み続けているのだからその機会を待っているうちに殺されてしまうという可能性も皆無ではない。今のところ相手にそういった様子はないが依頼内容からしてもチェックは相当に追い詰められているようだからそう長くは待ってはくれないだろう。いつ強行手段に出てくるかはわからない。ウォルの危惧はわかっているのだろうがそれでもクジュは今回脱出する気はないようだった。
「まあ、クジュがそう言うなら俺も従いますけど。じゃあどうしま

す？　庭でもぶらぶらしますか？」
「そうだな」
逃げ出さない以上特にすることもないのでシーナに言った通り庭を意味なくうろつくことにする。庭は先が見えないほど広く、チェックが王というのも本当なのだろうなと思えてくる。そんな少しずれた納得の仕方をしていると少し先の木々が生い茂っているあたりに人影が見えた。
「あ、人ですかね」
余程退屈だったのかウォルがそちらへ駆け寄っていくのをクジュが歩いて追いかける。人影は二人に気付いたのか木々の隙間を縫って姿を現した。
「……庭師さんですか？」
姿の現したのは老人だった。既に六十は超えているであろう老人は麦わら帽子を被り、手には剪定鋏が握られていた。そして両手には使い古されてかなりぼろぼろになっている軍手がはめられている。老人は二人を見てしょぼしょぼした目を細めると戸惑いがちに口を開いた。
「逃げないのかね」
「俺達インドアなんですよ。体力ないんです」
ウォルがやっぱり普段から鍛えておくべきですかね、なんとぼやきながらそう苦笑混じりに返せば老人は視線を落とした。
「この国は平和だ。長らく争いもない」

「それは良いことですね」
「そうだな。しかし平和すぎるあまり国民は国の内側を攻撃するようになってしもうた」
「と、言いますと？」

老人が言うにはこの国は平和すぎるそうだ。人間は本質的に攻撃的な一面を持っているもので、争いがないせいでその攻撃性は溜まりに溜まってしまっているらしい。その鬱憤は就任して間もない王にすべて向けられてしまっているとのことで。

「シーナには会っただろう。王と彼女は交際をしておるのだよ。身分違いの恋というやつじゃ」

平和ボケした国民は王の発言を一言一言入念にチェックし、少しでも失言があれば揚げ足をとって責め立てることで留飲を下げているのが現状だ。そう言った意味ではチェックとシーナの交際は絶好の批判の標的でしかない。王としての自覚が足りないだとか、身分の違いを知るべきだなどといった批判が毎日飛び交い、チェックやシーナ、弟であるナイトラへも度々飛び火して三人を疲弊させている。チェックはその現状をなんとか改善したくてクジュとウォルを呼びつけたのだそうだ。そう老人は説明する。

チェックの気持ちはわからないわけではない。国民がそんな調子なのならばシーナと別れたところでまた違う批判が飛んでくるのだろう。それならば国民のそういった感情を消してしまった方が早いと考えたのか。理屈はわかるがそう考えてもクジュにそれを実行することは不可能だった。協力してやりたいのは山々だが出来ないのだ。そんなことをクジュが考えていると説明を終えた老人が目線を上げて二人を見た。

「世間はそう言われますが、貴方達もそれが真実だと思われますか

？」
「はい？　それはどういう……」
老人は意味が理解出来ないと首を傾げる二人に構うこともなく剪定鋏を持ち上げて仕事で戻って行った。ウォルが何度か声をかけて引きとめようとするが老人は止まらない。出てきた時と同じように木々の隙間を縫って消えてしまった。
「……庭師の言うことば本当なら」
「クジュ？　いきなりどうしたんですか？」
また顎に手を沿えて考えごとに没入し始めたクジュに声をかけるがクジュの反応はない。クジュはしばらく無言でいると独り言なのかウォルに聞こえるか聞こえないかくらいの音量で呟く。
「俺に消して欲しいものは……違う？」
どういう意味だろうか、ウォルには全く意味が理解出来ない。クジュも完璧に意味を理解して呟いているわけではないようなのだがそれでもわかっている限りのことは教えてもらいたい。そんな気持ちでクジュに問おうと口を開きかけたところで背後から気配がした。
「余計な詮索はやめていただきたい」
急いで戻って来たのかナイトラの息は乱れていた。それでも愛想が感じられない表情は崩していないのは流石を言うべきだろうか。どこから聞いていたのかはわからない。だが余計な詮索をするなと言う以上詮索されると困ることがあるのだろう。それが何かを問うたところでナイトラは答えはしないのだろうが。それがわかっているからなのかクジュは何を言うわけでもなく顎から手を離した。考

えるのをやめたということを形で示したのかもしれない。
それに納得したのかナイトラは放置したことを謝罪しているのか一礼してから申し訳ありませんでしたと心のこもっていない言葉を口にした。

継ぎ接ぎ安全地帯

あれからシーナは仕事が忙しいそうでそれに代わるようナイトラが二人を監視した。世話などいう暖かくも友好的な雰囲気は一切なく逃げ出さないように見張っているというのが最も相応しい。ウォルはなんとかナイトラと親しくなろうと努力はしていたが無駄に終わり、クジュはそもそもそんな考えは持っていなかったのでナイトラとは睨み合うことが多かった。何度となく訪れた一触即発の空気をウォルがなんとか抑えて、ようやく夕方になる。仕事で忙しかったらしいシーナがようやく落ち着いてきたのか夕食であることを伝えに顔を出したことでようやく落ち着いた雰囲気になり始めた。

豪華な料理がずらり並んでいる中わずかな間ですっかり仲が悪くなってしまったクジュとナイトラがお互い目が合う度に数分睨み合う。それだけで殺伐としてしまう空気をなんとか壊そうとウォルは尽力した。

「シーナさんの作る料理はどれもおいしそうですね」

「ありがとうございます」

仕事中だからなのかシーナは空になった皿を下げたり、新しい料理を持ってきたりを繰り返すばかりで椅子に腰かけようとさえしない。仕事中なら無理に誘うのも良くないかと思いウォルが食事をしているとナイトラが急に立ち上がった。

「ん？」

何事かとウォルがナイトラを見ているとナイトラは舌打ち混じりに踵を返すと部屋を出て行ってしまった。二人が意味がわからず首を傾げているとナイトラの行動をシーナが補足した。

「また王から電話があったみたいです」

そう言われて耳を澄ましてみれば確かに電話が鳴っているような……気がしなくもない。こんなかすかな音にナイトラはすぐに反応出来るのか。そんな風に感心していると乱暴に子機を取る音が聞こえた。余程機嫌を損ねているのか。

「ナイトラさんに愚痴でも言ってるんでしょうか？」

騎士と王なのだからもっと込みいった話もあるのかもしれないがウォルの発想慮奥では浮かぶのはせいぜいこのくらいだ。冗談半分で言ってみたのだがシーナは困ったようにそうかもしれませんねとだけ言って笑った。

「この国は平和すぎて王が揚げ足を取られていると聞いた」

「そう、ですね」

「お前と王が交際していることで国民は我先にと嬉々して批判をしていると」

「返す言葉もありません」

これまでどれほどの辛酸を舐めてきたのか彼女の表情が苦痛に歪む。それでもここに留まり続けるのは離れたくないからなのか、離れられないのか。第三者にそんなことが判断出来るはずもない。

「いつか状況が改善されるといいですね」

そんな当たり障りのないことをウォルが言ってシーナが頷く。状況を改善するためにここに呼ばれているわけなのだがそのことには互いに触れずに茶番のようなやり取りをいくつか交わした。

ウォルはクジュと旅をしている。旅を始めたのは数年前の話だがそれよりもずっと昔、気付けば物心ついた頃からクジュとは一緒にいたように思う。それでもクジュの全てがわかっているわけではない。わからないことも未だに多い。今回もまたウォルはクジュの考えが理解出来ずに困惑していた。

あれから結局ナイトラは通話を続けていて戻ってくる様子はなかった。そのため食事を終えた二人は部屋へと戻り、一息つく。ベッドにダイブしたウォルをクジュが埃がたつという理由で咎めたが気にしない。これくらい自由にさせてもらわなければ息が詰まってしまう。

「クジュ、今回はよく喋りますね」

「……そうか？」

その返答で無意識だったのかと納得する。クジュは特殊な声をもっているせいで普段はほとんど口を開かない。しかし今回ここに連れて来られてからはクジュは当社比ではあるがよく喋る。そう言ったところでクジュは否定するのだろうがクジュが多弁になっているのは事実だ。これはずっと一緒にいたウォルだけが知っている。

「クジュは何が気にかかってるんですか？」

「……別に。ただの好奇心だ」

「そう」

これ以上問うてもウォルの求めているような返答はもらえそうもなかった。こうしている間にもこの呑気さが自分の首を絞めているのではないかと不安にあるがクジュが留まると言ったのだからクジ

ュの気が済むまだここにいようと思う。そんなことを口にすればクジュはこれ以上なく嫌そうな顔をして気持ち悪いことを言うなと呟くに決まっているので言わないが。

「おい」
「ん？」
「ん？　じゃない。何寝ようとしてる。寝巻に着替えろ」
「いいじゃないですか。クジュは神経質すぎるんですよ」
「なっ……！？」

誰が神経質だ。憤慨したクジュがそう怒声を飛ばすよりも早くベッドに潜り込んで視界を覆ってしまう。クジュが何を考えているかわからなくて、教えてもらえない以上ウォルに出来るのは待つことだけだった。

そうしてウォルは深い眠りに落ちる。意識の端でクジュに頭を撫でられたような気がした。

泣き虫キング

今日は早くに目が覚めた。

時計を見ればまだ朝と呼ぶにはまだ早い気もする。退屈なのでウォルを起こそうかと考えたが「こんなに早く目が覚めるなんて歳とったんですね」と皮肉を返されるような気がしたので起こさないことにする。結局昨日と同じ服のまま眠ってしまったウォルを起こさないように慎重にベッドから出た。ベッドは別々だがあまり大きな音をたててしまえば目を覚ましてしまうかもしれない。身体をベッドから受けせた瞬間にベッドが軋んで音をたてたがそれでもウォルが目覚めなかったことに安堵する。

早朝独特の冷気に身を震わせながら特に目的もなく部屋を出る。ゆっくりとドアを押し出して出来るだけ音をたてないように神経を集中させた。身体がなんとか通るくらいまで開けて、身体をその隙間に滑り込ませて部屋を出る。慎重にドアを閉めるがドアが完全に閉まった瞬間の金属音がやけに大きく響いてしまった。

何も考えずにとりあえず部屋を出てきたのでこれからどうしたものかと冷えた手に息を吐きつけながら考える。ふと、人影が目に止まった。

「あ」

ちょうど角を曲がって死角から姿を現したのは昨日出掛けたチェックだった。どうやら今帰って来たらしく昨日と同じ服を着ていた。睡眠を取っていないのか目にはうっすらと隈が出来ている。顔には疲労が色濃く浮き出ていたがクジュに気付いた途端それは笑顔に塗り潰されてしまった。

「よう、出迎えか？」

そういった解釈が出来るとは幸せな脳をしているな、と思うのだが疲弊しているチェックに声を聞かせて更に疲れさせてしまうのも酷だろうと無言を貫く。チェックは気分を害した様子もなく歩み寄ってくる。遠目には気付かなかったのだが至近距離でその顔を見ればその顔には泣き腫らした跡があった。

「ん？　俺の顔に何かついてるか？」

ぺたぺたと無遠慮に自身の顔を触りながら心配そうに問うチェックにどう答えたものかとしばし悩んだ後無言で目の少し下を指差せばそれで理解したのかチェックは「あー」と意味を為さない母音を吐き出した。それからばつが悪そうに頭を掻いてから目を逸らして口を開く。

「意外に泣き虫なんだよ。出来ればスルーしてもらえれば嬉しかったんだけどな」

そうは言うがそれなら顔を洗うなりして泣いた跡を消してくれれば良かったのではないかと思う。わざわざ口に出して言うほどのことでもないので口にすることはない。

チェックは眠いのか大きく欠伸を零すと欠伸のせいで目尻に溜まった涙を拭う。

「で、どうだ？　俺の依頼、受ける気になったか？」

「……何度も言うが現実的に考えて無理だ」

「そりゃ残念。これでも一応命令なんだがな」

脅迫か。クジュの声を聞いてしまったことで気分を害したのかチェックの足元がふらつく。体調が万全でない時にクジュの声を聞く

のは酷だろう。できればクジュも聞かせたくはなかったのだが返答しないでどうにかなりそうな問いではなかったのだ。不可抗力とは言えどこうもあからさまに悪影響を受けてしまっているチェックを見て罪悪感を覚えないわけではなかった。しかしその罪悪感を押し隠してでもクジュには今の内に問っておきたいことがひとつあった。

部屋に戻って睡眠でもとるつもりなのかクジュを通りすぎて歩き始めた背中に声を投げる。クジュの声を聞くごとにチェックが体調を損ねてしまっているのがわかるがこれで最後だ。

「アンタが本当に消したいのは何だ」

どうにも妙だ。国民の反発的な感情を消してもらいたいという依頼内容は決して長く返答を待てるものではないはずで。それなのにチェックは催促はしてくるものの依頼を強制させる様子はない。ということはその依頼そのものがフェイクなのではないか。飛躍しすぎだとは思うがクジュはそう考えている。見当違いだと一蹴されればそれはそれで良し。ただの推測でしかないのでこうして鎌をかけてチェックの反応を窺ってみる。反応はあまり期待していなかったのだが疲弊していたためか、それとも二人きりだったためかチェックの反応はクジュの予想とは異なっていた。

「さあ？　なんだろうな」

否定をしなかった。その返しは本当に消したいものは別にあると言ってることを同義だ。そしてチェックはそれをわかった上で発言したように思えた。どう返答したものか。だがこれ以上会話をしてチェックを無駄に弱らせるのも気が引ける。そんなクジュの躊躇を察してかチェックは振り向かないまま手を耳あたりまで持ち上げる

と何度か軽く振ってまた歩き始める。
ちゃりちゃりと衣服の装飾が擦れる音が廊下に響き渡った。

お約束のごとく

この日はいつもより遅く目が覚めた。
昨日着替えないままに寝てしまったせいで寝付くまでに時間がかかってしまったからなのかもしれない。ウォルが目を覚ました時、既にベッドにクジュはいなかった。クジュの方が先に目を覚ますことは決して珍しくはないので気に止めない。とりあえずベッドから抜け出てクジュを捜すべく部屋を出ることにした。体重をかけてドアを押し出して廊下に出る。クジュの姿はない。さて、どこに行ったのだろう。

「あの、クジュ様をお捜しですか？」

躊躇いがちにそう声をかけられて慌てて振り返れば洗濯物を大量に抱えたシーナが歩いていた。洗濯物は彼女の顔の半分を覆ってしまうほどまで積もっていた。視界が悪そうな彼女をそのまま放っておくのも気が引けて洗濯物の上半分を奪い取るようにして請け負う。

「半分持ちますよ」

事後承諾になったのはわざわざ許可を取っていれば彼女が遠慮をして手伝わせてくれないのではないかと考えたからだった。

「え、いえ！　大丈夫です！　お客さんに持たせるのは申し訳ないですし」
「俺がやりたいだけなので気にしないでください。で、これはどこに持って行けばいいんですか？」

シーナの言葉を無視するようにしてそう答えた後、更に問いを畳み掛けることで彼女の遠慮をこれ以上口に出させないようにする。それをどこまで察したのかシーナは「そういうことでしたら」と言って運ぶ先をウォルへ教える。シーナと一緒にウォルがそこへ向かおうとしたところで前方に見慣れない影を見つけた。

「ん？」

影はひとつではなかった。彼等は厳格そうな衣装に身を包み、それまでしてきた苦労を見る者全員に伝えるかのような白髪をしていた。その間から時折白く染まりきっていない黒髪が覗き見える。彼等は三人。いずれも気難しそうな表情をそれぞれに作っていた。

彼等は一体誰だろうかとウォルが問おうとシーナに目をやったところで驚きのあまり硬直する。シーナは目を見開いて彼等を真っ直ぐに見ていた。わずかに開いた口からは何かが発されることはないが何か発するとするなら悲鳴。そんな印象をウォルが抱いてしまうほどシーナの瞳には恐怖が色濃く宿っていた。

「……シーナ君」

彼等の一人のがさついた唇が動く。ただ名前を呼んだだけなのにその声音には批難が含まれているように思えた。そう感じたのはウォルだけではなかったらしくシーナは勢いよく頭を下げるとすぐに上げて廊下の端へと移動した。どうしていいのかわからずウォルもそれに倣って廊下の端へ行く。

「王でしたら自室にいらっしゃると思いますのでいつもの部屋でお待ちください。お呼びして参りますので」

緊張しているのかシーナは早口でそう捲し立てる。余程彼等が怖

いのかシーナは彼等を見ようとしない。彼等はそれに気分を害したのか隠しもせずに舌打ちをするとシーナとウォルの前を肩で風を切りながら通り過ぎて行く。シーナの前を通り過ぎ、ウォルの前を。

「君」

「はい？」

てっきり存在していないもののように声もかけられないのだとばかり思っていたので急に声をかけられて間抜けな声が出た。目が合ってしまわないように逸らし続けていた視線を咄嗟に彼等に合わせれば何の感情もこもっていない無機質な瞳達と目が合った。

「っ！？」

「君は客人かね？」

「……まあ、そんなところです」

厳密には拉致というか誘拐というか。彼等がどこまで知っているのかわからないので曖昧にそう返す。彼等は大して興味がないのかすぐにウォルから目を逸らした。

「そうか。それならゆっくりして行くといい」

まるでここを自分の家のように言う。そのことに言いようのない腹立たしさを覚えながらも無難な返しをする。わざわざ喧嘩を売るなんてクジュみたいな真似をするわけにはいかなかった。

「ありがとうございます。そうさせてもらいます」

そんな心にもないことを言えば聞いていたのかいないのか彼等はウォルの前も通り過ぎて行く。彼等が澱みない足取りで角を曲がり、

姿が見えなくなったところで金縛りから解けたようにシーナが動いた。
二、三歩後退って壁に身体が当たる。洗濯物を抱えた両手は小刻みに震えていた。
「シーナさん？」
「あの、洗濯物、お願いしてもいいですか。急用が出来てしまって」
ウォルの返答を聞くよりも早く持っていた洗濯物を全てウォルの持っていた洗濯物の上に乗せて、一礼をする。頭を下げたことで垂れ下がった髪を掻き上げてから彼女はウォルが口を挟む暇もなく走り去ってしまった。
「えええ……？　いや、まあいいんですけどね……」
結局クジュの居場所を聞くのを忘れてしまった。そんなことを今更考えながらとりあえずこの洗濯物の山を運び終えてしまおうと歩き出す。
「おっ、と……」
ずり落ちそうになる洗濯物を抱え直して再び足を進めた。

主に喧騒

暇過ぎるあまりクジュは官邸を徘徊していた。チェックは眠ってしまったようだし、シーナは忙しそうだ。ナイトラとは会いたくもない。シーナが鍵のかかっていない部屋なら自由に出入りしても構わないと許可してくれたのでお言葉に甘えて部屋という部屋に足を踏み入れることで時間を潰していた。

もうそろそろウォルが起きてくる時間だろうか。それならばもう戻ってもいいかもしれない。あらかた徘徊したので飽きもきた。元来た道を戻ろうと踵を返すと何やら物音が聞こえてきた。好奇心が打ち勝ってしまい、思わず曲がり角に隠れて身を潜める。

「またか。……わかった。シーナ、ありがとう。ナイトラ、悪いが一緒に来てもらえるか」

「御命令とあらば」

「またお前そういう堅い返しをだな……」

「王、あまり大臣を待たせては……。私は外で待っていますから、その、すみません」

「なんでシーナが謝るよ」

チェックとシーナとナイトラがそんな会話をしながらどこかへ向かっている。このままではクジュの潜んでいるところを通るので見つかってしまうだろう。やましいことは何もしてないので偶然通りがかった風を装えばそれでいいのかもしれないが一度隠れてしまった手前その方法をとることは躊躇われた。そのため三人に見つかってしまわないように角を少し行ったところで適当な部屋に身を滑り込ませる。部屋に入ってしまったことで音での情報しか拾えなくなってしまったがそれでも充分だろう。

「第三十二代国王・チェック。参りました」

クジュが入った部屋の一つ手前の部屋で立ち止まったらしいチェックはそう告げると部屋へ入って行く。それに続いてもう一人入室したようだった。護衛をしていると言っていたのでおそらくはナイトラだろう。それならシーナは廊下で待機しているのだろうか。見ることが出来ない分、どうしても推測の域を出ない。

「一か八か近付いてみるべきか？」

いや、しかしそれでは野次馬のようではないか。そんな真似は御免被る。プライドが邪魔してクジュが動き出せないうちにあちらの状況は移り変わっているようだった。

「――だ！　――――と言って――――」
「ですから、俺は――――しか――」

どうやら二人が怒鳴り合っているようだった。一人はチェックだろう。そしてもう一人はわからない。先程シーナが大臣がどうのと言っていたので大臣かもしれない。最初は二人のどなり声ばかりが響いていたが次第に怒鳴り声は増えていった。壁があるせいで内容までは聞き取れないが声が増える度にチェックが不利になっているようなのはなんとなく察することが出来た。

「……」

どういう状況なのかというのはよくはわからない。もしかするとチェックの自業自得なのかもしれないし、大臣に難癖をつけられているだけなのかもしれない。部外者であるチェックにはそれを判断することは出来ない。それが歯痒くもあるが仕方ないことだ。糾弾

されているらしいチェックに同情を覚えないわけではないがだからと言ってどうすることも出来ない。
クジュはどうすることも出来ずにしばし身を潜め続けていると怒声はだんだんとおさまっていき最後には聞こえなくなった。落ち着いて音量を下げて話すことにしたのか、会話自体が終了したのか。しばし沈黙が続いたかと思えばドアが重々しく開く音が届いた。ドアが開け放されたおかげが会話を聞きとることが出来る。

「何度もしつこく言いますが貴方は王なのです。いつまでも駄々を捏ねていては国民に示しがつきませぬぞ」

何度も繰り返し言われ続けてきたことなのかチェックは聞こえないとばかりに返事をしない。それに対して憤っているのか大臣達はクジュにさえ聞き取れるほど乱暴な足取りで部屋を出て行ったようだった。大臣の気はどうにも治まらないようで憤りは脇に控えていたらしいナイトラにも飛び火した。

「君も頑固な主君を持つと大変だな」
「仕事ですから」
「……ふん」

ナイトラの冷めた反応が気に入らなかったのか大臣は鼻を鳴らす。その足音はどんどん遠のいて行った。シーナの見送りを断って帰って行く大臣達はシーナを嫌っているのだろう。そう思えるほどに彼等のシーナへの対応は冷めきっていた。大臣達の足音が聞こえなくなったあたりでシーナがチェックの名を呼んだ。

「チェック、大丈夫ですか？」
「ああ、大丈夫。心配すんな。俺の方こそいつも、」
「王、それ以上は」

チェックが何かを言おうとしたところでナイトラがそれを遮る。緊張感を纏ったその声はこちらへ向けられているのではないかと錯覚してしまうほど鋭かった。実際、ナイトラの意識はクジュに向けられていたのかもしれない。クジュの気配に気づいていたからチェックの言葉を遮った。そう思えばますますクジュにはナイトラが気に食わなかった。

「チッ……」

それでもこれまで三人に対して持っていた違和感はクジュの中で確実に拡大しつつあった。出来ればウォルが何も察することがないまま終わってほしいのだがそれは難しいだろう。

「あー……」

絶えず呟くことで自身の声に侵食される不快感を味わいながらもクジュはその場に丸まって頭を抱えた。じわじわと内側から侵されていく感覚が思考力を奪っていくが今はこれぐらいがちょうどいいのかもしれなかった。

NOT以心伝心

「あ、クジュ。どこに行ってたんですか？」
「それはこっちの台詞だ。部屋にいなかっただろ」
「シーナさんに頼まれて手伝いをしてたんですよ」

呑気にウォルがそう言うので一気に疲れが襲ってくる。部屋まで戻ってきてウォルの姿が見当たらないことにクジュが動揺していると何食わぬ顔でウォルが戻ってきたのだ。長い間息を殺していたせいかクジュがかなり疲れ切っていた。おまけにウォルと離れていたので自身の声に侵されたままになってしまっている。気持ち悪さのあまり額に汗が滲む。吐き気すらも襲ってくるが吐いても楽にならないのはわかっていた。

「ウォル、何でもいいから喋れ」

一々説明するのが面倒でそれだけ言えばウォルは状況を察したようだった。ウォルはクジュにとってなくてはならない存在だった。クジュの声は特殊で聞いたものの神経を次第に侵していく。それは声の主であるクジュも例外ではなく、そうなれば一番被害が大きいのはクジュであるはずだった。しかし幸運なことにウォルはクジュとは正反対の性質を持っていた。クジュの声質が穢すことならウォルの声質は浄化することだった。

「さっきナイトラさんがクジュのこと捜してましたけど何かしたんですか？」

答えない。やはりナイトラは気付いていたらしい。そうでなければあの愛想のない人間がわざわざクジュを捜すはずがない。ウォル

も何か感づいてはいるのだろうがそれ以上は聞いてこない。黒ずんだ液体の中に水のようなその声をひとつ垂らせばそれだけでその黒全てを浄化出来るのではないかと思えるほど澄んだウォルの声はクジュの中に堆積するどす黒いものを浄化していった。ただ、ウォルの声も悪影響を全く及ぼさないわけではない。クジュの声がクジュ自身を侵すようにウォルの声はウォル自身も浄化を始めてしまう。

「……もういい」

気分の悪さが消え失せたところでそう言って手を軽く振る。それでもまだ口を開こうとするウォルの口を手で塞いで黙らせた。中途半端に口を開いたせいでウォルの口からはおかしな声が漏れる。

わざわざこちらからナイトラに会いに行く必要もないだろう。用件があるのならあちらから来ればいいと思う。奴等はまだ二人を殺さない。目標を達成していないからだ。それがわかっているからクジュは布団にもう一度潜り込む。体調は万全ではないし、起きていたところであの三人のいずれかに監視されて窮屈な一日を過ごすことになるのだろう。それならば寝ていた方がよっぽど有意義だ。

どうしていいのかわからず戸惑うウォルの腕を掴んで布団の中へ引っ張り込んだ。困惑を滲ませるウォルに気付かないふりをしてその腕を離すまいと力を込めればウォルが諦めたらしく脱力した。それに満足してからクジュはこれからどうするべきかと考える。どうにも彼等は何かを隠しているような気がするのだ。それがわからない以上はどう動いていいのかもわからない。それがもしクジュの手に負えないようなものだったとしたらなんとしてもウォルだけは生かさなければと思う。そしてその誓いをウォルに気取られてしまわないように早々に目を閉じると眠りに身を委ねた。

うっかり絶体絶命

ここ数日は窮屈な思いをして過ごした。

逃げ出さないようにするためなのかほぼ二十四時間二人には誰かの世話係という名の監視が張りついていた。クジュなどは露骨に嫌そうな顔をしたがウォルはさほど苦痛には感じていなかった。というのもチェック以外からは依頼の話を一切されないからだろう。クジュはナイトラを嫌っている上になんだかチェックを避けているようで、どちらかが監視につくと嫌な顔をする。でも何やら忙しいのかチェックとナイトラは片方、もしくは両者が不在であることが多かった。シーナにそれとなく聞いた話によれば民衆の不満が爆発寸前で王であるチェックとその護衛であるナイトラは多忙なのだそうだ。

それならば何故クジュに依頼を受けるように催促をしないのか。例えばウォルを人質にとって脅すだとか、無理に従わせようとするなら方法はいくつかあると思うのだがチェックはそれらを実行しようとする様子はなかった。ウォルにはそれが不思議で仕方ない。今こそクジュを使う時ではないのだろうか。わざわざそれを指摘してこちらが不利になる必要もないかと思い口を噤んでいるのだが官邸にいる全員がそれに気付いていないとは到底思えなかった。

そして今日は今日で何かあったらしくチェックが正装で一番豪華そうな部屋へ入って行くのを見かけた。それにナイトラとシーナが続く。特に大人しくしているなどという指示はなかったのでウォルは物音を極力たてないようにクジュの元へと急いだ。靴と床が擦れて音をたてないように足を上げて、音をたてないように足を床に下ろす。その作業を何度も繰り返してなんとかクジュがまだ寝ている部屋へと辿り着く。最近クジュはやる気がないのか自堕落になってしまっていた。

「クジュ、起きてください」

あまり声を大きくしてしまわないように注意しながらクジュが潜って膨らんでいる布団を軽く叩く。しかしクジュが起きる様子はなくわずかに身じろぎをしただけだった。素直に起きてくれるとは思っていなかったので仕方なくの端を握る。それから下から上へ持ち上げるようにして布団をクジュから引き剥がす。布団の中で丸まっていたクジュは差しこんできた太陽光が眩しかったのか目を細めた。

「……眩しい。布団おろせ」

「起きてくださいよ」

クジュの苦情は無視して先程見たものを話す。いつもと様子が違ったことを強調して話すと食いついてきたのかクジュが身を起こした。それでもまだ眠いのか目は半開きで眉間には不機嫌さからくるのか深い皺が刻まれている。起こされて不機嫌になるのなら自分で起きればいいのではないかと思う。

「……寝巻なんだが」

「知らないですよ。俺だって寝巻ですし」

着替えの場所を知らないのだから着替えようがない。それに寝巻といってもほとんど部屋着に近いもので一見しただけで寝巻だと気付かれてしまうことはないだろう。要はクジュは気にしすぎなのだ。渋るクジュの手を取れば観念したらしくベッドから緩慢な動作で出てきた。

「俺達の能力が透視だったりすれば部屋の中堂々を覗けるんですけどね」

「で、また余計な代償背負うつもりか？」

「別にそういうわけじゃないですけど」

ウォルとクジュは、特殊な力を持っている代わりにそれを使用する度に相応の代償を負う。ウォルは授かった以上仕方のないことだと割り切っているのだがクジュはそうでもないようで。未だにウォルとクジュ自身の能力を毛嫌いしている節があった。それなのに能力のことについて軽々しく話すウォルが気に障ったのだろう。それは悪かったと思う。でもそんなに怒る必要もないのではないかと思う。寝起きで不機嫌だからといって八つ当たりはやめてほしい。

三人が入って行った部屋まで案内するためにウォルが先を歩く。そういえばこの官邸は相当に広いはずなのだがあまり人を見かけたことがなかった。今までは誰かが必ずと言っていいほど監視についていたのでそこまで意識はしていなかったのだがこうして二人きりになってみるとこの官邸の静けさは異様だった。靴と床が擦れる音さえもこの静寂の中ではひどく大きく響いてしまう。足跡を潜めていたいこの状況からすれば煩わしいことこの上ない。文句を呟くことも憚られてただ目的の部屋を目指して足を進める。背後でクジュが緊張感なく欠伸を漏らした。

「ここです」

無駄に長い廊下を通過して突き当たったドアを指差せばクジュがもう一度欠伸。本当にやる気が感じられない。こんなことなら一人で来るべきだったかもしれない。ウォルが早くも後悔し始めているとクジュはウォルより前へ進み出ると音もなくドアへ張りついた。

「ちょっ、クジュ？」

ドアの向こうに悟られてしまわないように声を抑えながらクジュの行動を咎める。気付かれてしまったら最後、殺されかねない状況

に自分達が置かれているということをクジュは自覚しているのだろうか。否、自覚していないに違いない。クジュを引き戻そうと手を伸ばしたところでクジュがそれよりも早くドアの隙間に手をのばした。そろそろと隙間に指を差しこんでわずかな隙間を作ったクジュは顔を近付けて中を覗きこむ。

流石に二人で覗くのは勢い余ってドアを開けてしまうなんてお約束なパターンに陥ってしまいそうなのでウォルは隙間から横へずれた。あちらの視界に万が一にも入ってしまわないようにするためだ。

中央の豪華そうな椅子には王であるチェックが深く腰掛けていた。その横には剣に手を置いたナイトラが控えている。その少し離れたところにはシーナが壁沿いに遠慮がちに控えていた。そしてチェックの正面には腰に剣を携えた使者が跪いている。

流石は王と言うべきかこれまでクジュはチェックに対してあまり厳格なイメージは抱いていなかったのだがその表情は固く引き締められていて、普段のだらしない雰囲気は一切感じられなかった。ナイトラは普段と変わらず仏頂面ながらも使者に遠慮のない殺意を飛ばしていた。射るような目はそれだけで使者を殺してしまいそうだ。シーナはここにいることが場違いだということがわかっているのか居心地が悪そうに目線だけを泳がせていた。

「この度は如何様か」

普段はどこか間延びした喋り方をするくせにチェックは淡々とそう使者へ問う。その声音には一切優しさといった類のものは含まれていないようだった。いつもこんな調子なのか、それとも今回が特別なのか。

使者は特に怯んだ様子もなく「はっ」と口にすると顔を上げてチェックと目を合わせた。

「何度か忠告させていただいたあの件について大臣より伝言を預かっております」
「やっぱりそれか」

何度も言われ続けていることなのかそれを聞いた途端チェックがうんざりした顔を作る。シーナが申し訳なさそうに俯くがナイトラの表情に一切変化は見られなかった。主君と姉の問題だというのに随分冷めた反応だと思うがクジュにとってそんなことは大した問題でもない。
使者はチェックが露骨に聞きたくないといった表情をしているにも関わらず続けた。子供のように感情をすぐに表情に出してしまうチェックを快く思わないのか咎めるように「王」と呼んでから使者は続けた。

「我々も王の御意志を尊重したいのです。しかし身分を越えてはなりません。これはこの国が遥か昔より遵守してきたことです。それを王が易々と破ってしまうわけにはいかないのです。どうか御理解を」

理解を乞うように再び頭を垂れた使者をチェックは困り果てた表情で見下ろす。どう返答するべきか迷っているのかその憂鬱を凝縮したように思われる深い溜息を吐き出した。

「何度も言ったとは思うが俺は譲るつもりはない」
「……そうですか。それで国民の不満が募ったとしてもですか？」
「どうせ何してもぶーぶー言われるなら好きなようにさせろ」

何度も同じやり取りを繰り返してきたのかチェックの言葉にはあきらかな疲弊が含まれていた。その返答を聞いて使者が申し訳なさ

そうに目を伏せる。

「そうですか。では仕方ないですね」

使者は視線を落したまま腰の剣へ手をやる。それを一瞥したナイトラの眉間に皺が寄った。そしてチェックは逆に面白そうに口端を吊り上げる。よく事情を知らないクジュにもこの後の展開は安易に想像出来たがチェックはそれを楽しんでいるようだった。

「で、どうするんだ？」

おかしくてたまらないとばかりに口許を緩めるチェックをナイトラが横目で睨みつける。それもそうだ。守るべき者がこうも緊張感を欠いていれば守りにくい。毎日こんな様子のチェックを守っているのかと思うとナイトラに同情してしまう。

「はい、それならば」

鯉口を切った使者は先程までの申し訳なさそうな表情に無表情を上塗りした。それを視認したナイトラが剣に手をかけたのと使者が動き出したのは同時だった。

「消えてもらうまでです！」

剣を引き抜いた使者が床を蹴って駆け出す。ナイトラはチェックを守るために庇うように前に立ちはだかると剣を引き抜く。しかし使者はそれを一瞥すると方向転換をして再び駆け出した。使者の視線の先にいるのはシーナ。最初から使者の狙いはシーナだったようだ。チェックがシーナの名を叫び、ナイトラが舌打ち混じりに使者の背中を追う。シーナは恐怖に震える足を叱咤して逃げ出すがその

時点で使者はかなりの距離を詰めていた。足をもつれさせながらもなんとか逃げていたシーナは動揺のせいかバランスを崩し、床に転がってしまう。彼女の眼前にまで迫った使者は剣を振り上げた。しかしそれを振り下ろすよりも早くナイトラアが追いつき剣を構える。剣を振り下ろすのを阻止しようと動き出したところで使者は素早くナイトラへ方向転換すると振り上げていた剣をナイトラへ斜めに振り下ろした。ナイトラはすかさず後方へ飛び退いたが攻撃の全てを回避することは出来ず、剣の動きに沿って服が裂け、赤い線を作りだす。

「最初から、これが狙いか」

「王の騎士は大変優秀だと聞いておりましたので」

ナイトラの呟きでクジュはようやく理解する。チェックを殺そうとしたところでナイトラが妨害するのはわかりきっている。だから先にナイトラを始末してしまわなければならない。だから使者はシーナを狙ったと見せかけてナイトラが来たところを素早く身を翻してナイトラに目標を定め、傷を負わせた。ナイトラの行動を予測していないと出来ない計画ではあるが使者の読み通りに動き、傷を負った。傷口は深くはないようだが血が重力に従って滴り落ちている。

「利き腕の負傷は多少なりとも貴方に不利に働くはずです」

「利き腕の負傷如きで護衛がつとまらなくなる者は騎士とは言えない。王の騎士を甘く見るな」

使者の挑発に冷たく返したナイトラは使者に攻撃を仕掛けるがやはり利き腕の負傷は大きいようで使者に軽々と受けられてしまった。舌打ち混じりにナイトラは身を引いて耐性を整える。使者は優勢にも関わらず気は抜いていないようでナイトラを睨みつけていた。

「ナイトラ、もういい！　下がれ」
「ふざけんな。もういいってなんだ、死ぬ気かアンタ」

チェックの言葉に対してナイトラは一瞥くれることもなくそう返した。最早王に対する言葉遣いではないのだがそれに対する疑問を投げる者はこの場にはいなかった。そんな余裕がないと言った方が正しいのか。二人が戦っている間に起き上がっていたシーナはチェックの傍まで駆け寄るとチェックに逃げるように促した。しかしチェックは首を横に振る。そして逃げるどころか睨み合っている二人の方へ歩み寄った。

「王！　お戻りください！　駄目です！」

シーナは叫ぶが恐怖で動けないのか直接チェックを引きとめることはしない。それをいいことにチェックは未だにお互いに牽制を続ける二人の間に割って入る。本来なら制止しなければいけないはずのナイトラもあまりに唐突な行動に呆気にとられているようだった。しかしすぐに正気に戻ったようでチェックの肩を掴むと強引に後ろへ下がらせようとする。だがチェックが動く様子は見られなかった。チェックは使者を真っ直ぐ見据える。

「それが国の方針なら仕方ないな。殺したいならさっさと殺せばいいだろ」

疲弊しきった表情で言うチェックの言葉は本音だろうか。クジュの位置からは使者の顔は見えないがそれでも動揺は伝わって来た。それでも使者の任務はチェックを抹殺することだ。それを違えることはないだろう。その証拠に使者は剣を強く握り直した。そして剣を突き出そうとしたところでナイトラがチェックの首根っこを掴んで思い切り後ろへ引き倒す。

「うおっ！？」
「倒れてろ、馬鹿王」

ナイトラは腰を落とすと使者の突きを回避する。それから剣を逆に構えると柄を使者の鳩尾に埋め込む。突然のことに使者がくの字に折れ曲がった。今の一撃で使者は意識を失ったのか体重全てがナイトラにかかる。ナイトラはそれを軽々と受け止めると刀を戻してからクジュを睨みつけた。

「この馬鹿が。アンタ今何しようとした」

これは確実に王に対する態度ではない。しかしチェックはそれを咎めない。それはシーナも同じで、ただシーナは心配そうな目で二人を見ているだけだった。視線だけで殺してしまえるのではないだろうかと錯覚してしまうくらい怒気が含まれたナイトラの視線をチェックは軽々と受け流す。それからナイトラに身体を預ける使者を一瞥した。

「それよりもそいつどうするか考えようぜ。始末すればそれこそ問題になっちまう」

わざとらしく話題を逸らしたチェックにナイトラが盛大な舌打ち。チェックはそれを無視すると顎に手を置いて考え事を始めた。シーナはしばらく状況に追いつけず固まっていたがナイトラの傷に目がいくと弾かれたように走り出した。

「救急箱取ってきます！」

あまりに突然の行動で慌てたのはクジュの方だ。慌てて周りを見

渡すが隠れられそうなところはないし、別の部屋に隠れようにも部屋まで移動している間にこちらに向かってくるシーナの視界に入ってしまう。どうしたものかと考えたのは一瞬でどうするべきかなんて決まっていた。

「へ？　ちょっ、クジュ」

咄嗟のことでウォルが制止しようとするがそれを無視してドアを思い切り押し開けた。同時にシーナが引き攣った悲鳴と共に足を止め、チェックとナイトラが驚愕の表情でこちらを見ている。どうやら今回は気付かれていなかったらしい。三人が直面している問題を解決する提案をしてやろうと思ったが声のせいで憚られて、振り返ってウォルに視線を投げた。まだ隠れていたウォルはそれで観念したのかドアの陰から申し訳なさそうに姿を現すとクジュの考えている提案をクジュに変わって口にした。

「お困りのようですね。皆さんご存じかと思いますがクジュはちょっと特殊なんです。よろしければ協力しますよ」

そう言ってはみるもののクジュの考えが読めないのかウォルは不安げな視線を投げてくる。だがそれを今わざわざクジュに伝える必要はないだろう。その視線には気付かないふりをして三人を見た。

何を隠しているのか知らないがこの機会にさっさと暴いてしまおう。こんなところにいつまでも留まっているほど暇ではないのだ。

整理整頓

ソファーに身を投げ出したクジュはぐったりとしていた。全力疾走した直後のように身体は汗ばんでいて息苦しそうに時折咳き込む。血の気が引いて青褪めている顔を両腕を交差させることで覆い隠して息を整えることに専念している。そんなクジュに声をかけることはせずにウォルはウォルのやるべきことをすることにした。

「おい、大丈夫なのか？」

「あの、何か持ってきましょうか？」

チェックが心配に表情を曇らせ、シーナが腰を上げる。しかしウォルはシーナを制した。

「いえ、大丈夫です。あれをやった後のクジュはいつもこんな感じですから。しばらくすれば治りますし」

喋る余裕もないのか黙り込んでいるクジュの背中をさすりながらそう説明する。

先程チェックを抹殺しようと行動を起こした使者は捕獲され、彼をこれからどうするべきか審議されていた。そこでウォルがクジュの指示により提案したのは使者の記憶を消してしまうことだった。そもそもクジュが記憶を消すことが出来るということを知った上でチェックが連れてきていたのだからその辺りの説明は省くことが出来た。いくつかの手順を踏んで使者の記憶をクジュが消し、解放した。その反動というか副作用でクジュはこうして体調を崩しているわけなのだがそれを見慣れているウォルからすればそこまで心配することでもない。心配は心配なのだが治るとわかっているものに気をかけすぎても仕方ないだろう。

「それよりさっきからナイトラさんの姿が見えないんですけどどう

かされたんですか？」

使者を送り返した後、チェックとシーナは弱ったクジュを休ませるために部屋に案内してくれていた。クジュを支えながらこの部屋で休ませてもらっていたので最初は周りを見渡す余裕もなかったのだが次第に余裕が出来てきたところそのことに気付いた。

「あれ？　そういえばさっきから見ねえな。シーナ、知らないか？」

「……そういえば、私も見てないです」

「そうか」

シーナの返答を受けてチェックは立ち上がった。同じ姿勢でいたせいで身体が固まっていたのか両腕を上に突きあげて背伸びをすると踵を返して部屋を出て行った。どうやらナイトラを捜しに行ってくるらしい。少しくらい説明をしてくれてもいいのではないかと思うのだがシーナは慣れているのか何も言わなかった。

「お茶でも淹れますね」

部屋の隅の棚に置かれているポットを掴むとその横に置いてあるティーポットに茶葉を適当に放り込んでからポットの上部を押してお湯を注いだ。各部屋を見て回って思ってはいたのだがどうやら全部屋にポットとティーポットが置かれているらしい。湯の入れ替えが大変ではないかと思うのだが。シーナはカップを二つ棚の中から取り出すとティーポットを少し傾けた。褐色をした液体がティーカップからカップへ注がれる。慣れた手つきに感心しているとシーナはその視線を受け流しながら一つ目のカップに注ぎ終え、と二つ目のカップに注ぎ始める。

「すみません、いつも騒がしくて」

「いえ、大丈夫ですよ。それよりも少し聞きたいことがあるんですけどいいですか？」
「私が答えられる範囲なら」

シーナが微笑みながらそう返してくれたのでクジュを一瞥してから口を開く。どうやらクジジュはまだ喋ることが出来る状態ではないらしい。先程よりは落ち着いたようだったが未だに顔色は悪くぐったりとしていた。

「ナイトラさんはチェックさんが嫌いなんですか？」
「私の口からはなんとも。本人から聞くのが一番いいと思います」

シーナは自分の口からその問いに答える気はないらしく注ぎ終わったカップをクジュとウォルの前へ置いた。仕事だからなのか笑みは絶やさない。お茶をありがたく受け取って啜りながらクジュの肩を叩いてお茶をいただいたことを知らせる。すると両手を顔から離して一度深く息を吐くと背中をソファーから離してカップを手に取った。未だに顔色は悪い。カップに口をつけてちびちびと飲み始めたクジュの目線は下がっていてシーナを見ようとはしない。体調の悪さを押し隠すように深呼吸を何度か繰り返してからクジュは顔を上げてシーナを見た。その表情は彼女の小さな変化も見逃すまいとしているようでシーナは困惑した表情でウォルを見る。助けを求められているのだろうか。しかしウォルにもクジュのはっきりとした意図はわからないので助けようがない。

「……お前は？」
「はい？」

クジュが口を開くことは予想していたのかシーナは怯える様子もなくクジュを見た。わかっていてもクジュの声を不快に感じてしま

うのはどうしようもないらしくその額には汗が伝った。それを見てこれ以上言葉を重ねるのは酷だと思ったのかクジュはカップを両手で持った体勢のままちらりとウォルを一瞥した。意味を理解しきれていないシーナに質問を補足して伝えろということだろうか。それ自体は構わないのだがウォルがクジュの意図を汲みとれていないという可能性を考えていないことが気にかかった。しかしそれを問っても仕方がないのでクジュの指示通り補足を請け負おう。

「シーナさんはチェックさんのこと好きなんですか？」

シーナとチェックは付き合っているという。それならば当然シーナはチェックを好きなはずだ。この質問に意味があるとは思えない。しかしクジュがこんな質問をするということは意味があると感じているからだろう。どうせ問い詰めたところで真意は教えてもらえないのだから大人しく指示に従っておこうと思う。

「わ、私は……」

シーナは質問を受けてかなり動揺しているらしく目を絶え間なく泳がせた。唇は小刻みに震えていて言葉を発することも難しいようだ。当然の質問をしただけなのにシーナがここまでうろたえる理由がウォルにはわからなかった。クジュにはわかっているのだろうか。そんな思いを抱きながらクジュを見ればクジュは睨むようにシーナをまっすぐに見ていた。そこに感情が込められている様子はなく、下手をすれば淡々とした殺意すらも感じた。

「クジュ、その顔怖いです。シーナさんが怖がってるじゃないですか」

実際にシーナが怖がっているかどうかはわからない。だが他者を

そんな目で見るというのはどうかと思う。言外にそう非難したのだがそれがクジュに伝わったかどうかはわからない。クジュの反応を知るよりも早く、異変が起こったのだ。

空気を切り裂くように強烈な破壊音が響いて思わずウォルは身を竦ませる。何かが割れたのは確かだろうがそれが何かを特定することは出来なかった。陶器か何かだろうか。それよりも今一番気になるのは音が聞こえてきた方向だ。

「えーと、俺の記憶が正しければチェックさんが行った方向から音が聞こえてきたと思うんですけど」

控えめに意見して自らの記憶が正しいという確信を持とうとすればシーナが今にも躓きそうな危なっかしい動作で部屋を出ようと駆け出した。クジュも未だに具合が悪いながらもそれに構うことなくシーナの後を追う。しかし身体が重いのはどうしようもないのかその足取りは緩慢だった。それに苛立ったクジュが舌打ちを漏らすので肩を貸して歩き出す。手を借りることが気に入らないのか悔しげな表情をされたが言い合っている場合でもないので気付かないふりをしてシーナの後をゆっくりとした足取りで追うことにした。

秘密

二人がシーナに追いついたのは五分ほど後だったと思う。ここは無駄に広いので追いつくのにやたらと時間がかかってしまった。まだ事態は収拾していないらしく怒鳴り声が響いていた。

「シーナさん、大丈夫ですか？」

クジュを半ば引き摺るようにしてなんとか追いつけばシーナは扉近くでどうしていいのかわからずひたすらに周りをうろついていた。何度かやめてくださいという悲痛な叫びが聞こえてきたがチェックとナイトラはそれに耳を貸していないようだった。

クジュを離して、クジュが壁に寄り掛かったのを見届けてから部屋の中を覗けば漫画のようなタイミングで目の前を陶器がもの凄いスピードで通過していった。鼻先を掠めた陶器は減速しないまま廊下の壁に直撃して粉々に砕ける。驚きのあまり身体を仰け反らすが当の本人たちは全くこちらのことなど気にしていないようだった。

「こんっの馬鹿が！　王が騎士庇おうとしてどうする！」
「お前こそ王になんて口ききやがる！　お前なんて騎士失格だ！」
「はっ、なんとでも！　どうせ俺は騎士失格だ。で、それが何か？」

喧嘩の内容は理解出来るような、出来ないような。どうやら先程チェックガナイトラを庇うような動きを見せたのがナイトラの怒りに火をつけているようだった。しかしそれだけでここまで身分を無視した大喧嘩が勃発するものなのだろうか。ウォルには理解出来ない。クジュは壁を支えになんとかドア付近まで歩いてくると中を覗きこんだ。

部屋の中は酷い有様だった。お互いに投げつけたと思われる陶器

などの残骸は部屋中に散らばっていていつ怪我をしてしまわないとも限らないような状態だ。武器まで持ち出して喧嘩をしていたのか棚には真新しい切りつけられた傷がいくつも見受けられた。しかし武器は二人の手元にはなく投げ出したように不規則に床へ破片に混じって転がっている。

「お前はいつもそうだ！　身分がどうこうって、関係ないだろうが！」

「関係ないわけないだろ馬鹿王。少しは頭冷やせ」

「誰が馬鹿だ！」

チェックの方が不利なのかナイトラが見下すように淡々とそう返す。するとチェックの怒りに触れたのかチェックは近くの棚の引き出しを勢いよく引くと中に整頓して収納されていた宝石の散りばめられている装飾品を取り出した。手に収まるサイズの鏡を掴み出すとそれをナイトラに向けて全力投球する。ナイトラがそれを回避すればチェックは引き出しの中から指輪を取り出して投げつけた。それにも宝石が埋め込まれていたりするのだろうがウォルの位置からはよく見えなかった。

「もう、やめてください！　二人とも、お願いですから！」

そう懇願するシーナは涙を流していた。それでも部屋の中に入ることは出来ないようでドア付近で足が止まっていた。クジュは何も言わず険しい表情で喧嘩を続行する二人を眺めている。その険しさは体調の悪さからくるのか、それとも別の何かからくるのかはウォルには読み取ることは出来なかった。

「俺は！　俺はなあ！」

次から次へと物を手当たり次第に投げつけるチェックはそのうちに涙声へと変質していき、それに呼応するようにナイトラは投げつけられた物を避けることを唐突にやめた。それは泣きだしそうになっているチェックに対して驚いているようでもあったし他にも意図があるように思えなくもなかった。

チェックが投げつけた物のひとつである鋏はナイトラの頬を掠め、傷を作って床へと転がった。鋏が目に当たれば失明しかねないのだがナイトラは避けようとはしていないし、チェックはその危険性を判断出来る程の冷静さは持っていないようだった。

「どうすりゃいいんだよ！　教えてくれよ！　俺は！」

投げる物が尽きたチェックは崩れる表情を隠すように両腕をクロスさせるとそれで顔を覆った。それでも隠すことが出来ない口は零れ出しそうな泣き声を無理矢理押しとどめようとしているせいで酷く歪み、絶え間なく震えていた。溜め込んで溜め込んで、噴出してしまいそうな感情をそれでも吐き出させまいと必死に堪えているような印象を受ける。その印象と実際はたいして違いがなかったのかチェックは唇を震わせたままゆっくりと口を開いた。

「俺はお前が好きなだけなんだよ……」

衝撃的な告白だ。ウォルは驚きの余りに周りを見渡すが喧嘩を眺めるシーナもクジュもチェックの告白に驚いた様子はなかった。クジュは驚く気力もないのかもしれないがそれにしても無反応なのは気にかかった。

「クジュ、もしかして気付いてたんですか……？」

クジュは黙り込んだまま何も言わない。否定ならどういう形にせ

よ反応を見せるはずだ。それならばこれは肯定という判断でいいのだろうか。横目でシーナを見れば彼女は床にへたり込んで涙を流し続けていた。顔は手で覆われていて嗚咽しか聞こえないが泣いていることは間違いなかった。彼女を慰めるべきか、喧嘩を仲裁すべきか迷っていると喧嘩は方には変化が現れたようだった。

「どうしろって言うんだよ。離れればいいのかよ？　離れて、どうなるんだよ。離れて普通にやってける

る自信はねえ。でも迷惑なんだろ、離れたいんだろ？　言えよ。頼むから、そう言ってくれよ！」

血を吐くようにチェックが叫ぶ。涙声になっているせいで叫びは掠れてところどころよく聞き取ることが出来ない。それでも全体の意味を理解するには充分だった。鼻を啜りながら嗚咽を漏らすチェックはもうなりふり構ってはいられないらしい。目を何度も服の袖で強く擦って涙を無理矢理拭うと腫れぼった目で真っ直ぐにナイトラを睨みつけた。ナイトラはそれに動揺した様子も見せず着実にチェックに歩み寄る。

チェックの発言は矛盾だらけで、冷静さを欠いていることはすぐにわかる。だがナイトラは先程から一切喋らず表情を崩さないので何を考えているのか、冷静なのかそうでないのかは判断出来ない。もしもナイトラまで冷静さを欠いているというのであれば割って入って止めなければいけないのだろう。そんな風に身構えながらナイトラの行動を見逃してしまわないように観察する。ナイトラは喚くチェックの目の前まで歩み寄ると突然両手を大きく広げた。あまりにいきなりの行動にチェックが肩を震わせて驚くがナイトラは意にも介さない。

「もう黙れ」

ここでようやく不愉快そうにではあるが表情を歪めたナイトラはチェックの背中へ手を回すと優しい手つきでチェックを抱き締めた。あまりにスマートな動作に誰もが反応出来ずにいるとチェックは驚愕の余り泣き止んだ。空気に溶け込むような震えた声はもう聞こえなくなっていた。

「……」

何か言いたいのだろうが声のせいでクジュが何も言えないでいる。そこまではわかったのだが流石に何を言いたいのかまではウォルにはわからない。それが歯痒い。そんなことを考えているのがクジュの方には伝わってしまったらしく気まずそうに目を逸らされてしまった。余計に歯痒い。

チェックを抱きこんだナイトラは目線をこちらにやると億劫そうに首を動かした。その表情はひどく面倒臭そうで、そのくせチェックにうつされたのか泣き出しそうに瞳が細められている。

「クジュ様、ウォル様、姉さん。申し訳ないのですが客間で待っていてください。チェックが落ち着いてから説明に向かいます」

ウォルとクジュに対してなのだろう。丁寧な言葉遣いをするナイトラはこれ以上三人に踏み込まれることを拒絶していた。しかしそんなことは知らないとばかりにクジュは部屋の中で踏み込もうとする。クジュの肩を掴んでそれを阻止すれば睨まれたが気にしない。

「ナイトラさんが出て行ってほしいって言ってるんですからその通りにしましょう。話は後でも出来るじゃないですか」

それでも止まろうとしないクジュの脇に手を差し込み、抱えるよ

うにして無理矢理引き摺っていく。まだ体調は万全ではないらしくさほど抵抗は受けなかった。それを幸いとばかりにクジュを引き摺る。シーナに客間の場所を聞いて案内してもらう。シーナも戸惑っているようで先程までの泣き顔は引っ込んで困惑が前面に押し出されていた。

「すみません、客間はこちらになります」
「あの、シーナさん」
「はい、なんでしょう」

わずかながら抵抗を試みるクジュをなんとか押さえこんで運びながらシーナに目をやる。最初は困惑していたシーナはチェックとナイトラから離れれば離れるほど冷静さを取り戻してきているようだった。客間が近付いてくるとシーナは弱々しくウォルへ微笑んだ。

「心配してくださらなくても大丈夫ですよ。最初から私の立ち入る隙間なんてなかったんですから」

自虐ではないらしく諦めた様子のシーナはその一言でウォルの表情が悲痛に歪んでしまったことに気付いたのだろう。もう一度大丈夫ですからと繰り返してから客間のドアを開けた。金属が擦れ合う音を何気なく聞きながらまるで悲鳴みたいだなんて馬鹿げた感想を抱く。するとそれを見透かしたようにクジュが鼻で笑った。何がおかしいのかとクジュを見たがクジュはウォルから目を逸らしただけで何も語ろうとはしなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8121w/

ナイトキングの国

2011年10月12日14時50分発行